

はしがき

本論集は 21 世紀 COE 研究「プラトンとロシア」参加者による最初の刊行物になります。2005 年 8 月 23-24 日と 2006 年 2 月 18 日に、北海道大学スラブ研究センターにおいて行われた研究発表会における発表とディスカッションをもとにして執筆された論文を集めました。ロシアにおけるダーウィンやニーチェの受容というテーマは、既に欧米で研究が進んでおりますが、プラトンの受容についての研究は進んでいないと言えるでしょう。何しろプラトンはロシアという国家が生まれる遙か昔に活躍した哲学者ですから、ダーウィンやニーチェのようにはいかないのです。複雑で手強い題材ですが、ロシア文化史を研究する際には避けて通れない問題のように思われます。

巻頭に置かれた杉浦論文は、ロシアにおけるプラトン受容の概要を分析すると同時に、その中心人物の一人である哲学者ウラジーミル・ソロヴィヨフのケースを論じています。望月論文は、ソロヴィヨフの論敵でもあった著名な作家フョードル・ドストエフスキーにおけるプラトンの要素が論じられています。以下は時代順に配置されています。ソロヴィヨフの影響を大きく受けた哲学者セルゲイ・トゥルベツコイのロゴス論を扱っているのが根村論文になります。北見論文は文学者でありかつ思想家であったヴァチェスラフ・イワーノフのプラトン受容を分析しています。これまでの思想家よりも少し後の世代に属する思想家を扱ったのが以下の二本の論文になります。貝澤論文は、ソヴィエト期に銃殺された宗教哲学者フロレンスキイのプラトン論を分析し、大須賀論文はソヴィエト期をなんとか生き延びた哲学者ローセフのプラトン論を考察しています。ローセフはフロレンスキイの弟子を自認しているだけに、貝澤論文と大須賀論文は重なり合う部分も多く、比較しながら読んでいただきたいところです。最後に置かれた川名論文は、ポーランドのメシアニズムを扱っており、我々の視点をなるべくロシアに限定せずに、広げてゆきたいという希望を示しています。

まだ研究は始まったばかりですが、今後の実り豊かな成果につながるような、忌憚のないご意見・ご批判をいただければ幸いです。

なおスラブ研究センターCOE 支援室の伊藤恵理氏と細野弥恵氏には、様々な点でお世話になりました。お礼申し上げます。

編集担当者：根村 亮